

第15回「やまだ塾」

昨日2日、八尾で第15回「やまだ塾」を開催した。会場前に「駄菓子屋 本日 OPEN」の看板があった。懐かしいお店で、いろいろな駄菓子が並んでいた。

「こども食堂」の日であり、小学生が美味しそうに食べていた。いつものように、ヴィーガン料理のランチを注文した。パスタとサラダとスープ。八尾でとれた若ごぼうを初めて食べた。

ランチのあとは美しい庭を散策した。訪れるたびに、景色が変化していて、季節を実感できる。椿がきれいに咲いていた。苔が鮮やかさを増していた。苔が石と「共生」している。庭の苔を見ていて、名古屋東山公園通り沿い「苔みち」を思い出した。

塾では、私から前回（3月5日）以降の動きを振り返りながら、ウクライナ情勢から国政、そして大阪「維新政治」について問題を投げかけた。

朝日3月27日の記事で、大阪市保健所が「第6波」で再びパンク状態になったのは、想定の甘さや内部の連携不足によるとしているが、果たしてそれだけなのか。政令市の中でも脆弱な大阪市保健所、大阪市廃止やIRカジノ誘致に邁進する市政の姿勢、「維新政治」こそが問われるべきではないか。そんな問題意識から語った。

議論は「脱線」しながら多岐にわたったが、だんだんと論点も明確になっていった。先日の大阪市会本会議でIRカジノ誘致が維新・公明などにより「同意」された。公明の動きをどう考えるか。カジノについて賛否が分かれているのに、多様な意見が政治に反映されているのか。政治家の質とともに、主権者（有権者）の政治に対する意識をどう変えていくのか。

大阪の将来に議論は進んでいった。大阪は東京の後追いではなく、人が集まりやすい、大阪ならではの持ち味、魅力を活かした街づくりが求められる。東京では得られない、住みやすさが大阪にはある。多くのルーツをもつ人が集住する、多様性のある街が大阪ではないか。ウクライナなどから「難民」を積極的に受け入れてはどうか。大阪府市の一元化などでなく、大阪市が政令市としての強みを活かすこと、狭域レベルの自治の力をつけていくことが大切だ。夢洲へのIRカジノ誘致、「エンタメ」志向でなく、地道な産業振興、安全・安心の市民生活が求められている。塾での大阪論は今後も続く。

(2022年4月3日)

